

# みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 11 NO.1

(通巻 42号)

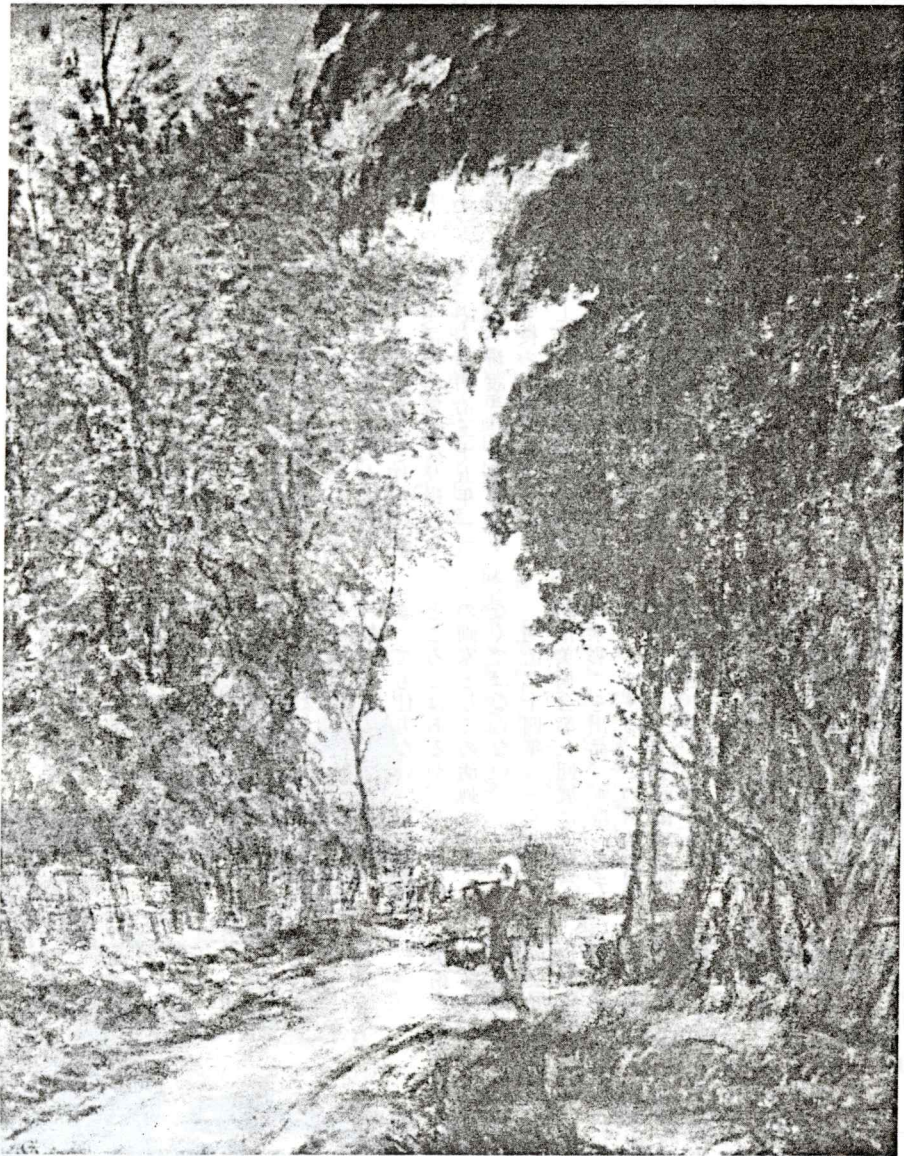
昭和59年5月1日発行

編集・発行人 平野 肇

〒 260

千葉市中央港1丁目10番1号

☎0472-42-8 3 1 1(代表)



日本の高湿の自然を、淡い調子で水彩画風に仕上げられた秀作で、死去する前年の第五回新文展に出品された。画面構成は、点景人物(画面の下部四分の一)に視点を置き、上部は左右に樹々を配置し画面を二分する。樹々間の空間、斜にのびた道、少し右寄りに位置する人物などが奥行を表現する。都島の画業の集大成ともいえる作品である。

都島 英喜「村の道」(油彩、1942年、115.8cm×80.9cm)



# 都鳥英喜展

四月二十七日(金)〜五月二十日(日)

都鳥英喜(とどり・えいき)。この日本近代洋画史に名を残すひとりの洋画家について、その生涯、ましてその画業について詳しいことは知られていない。

明治六年(一八七三)堀田藩馬術指南役を勤めた父重成と母たきの三男として、現・佐倉市に生まれ、昭和十八年(一六四三)京都で死去するまでの七十年の間、太平洋画会の設立・関西洋画壇の形成と多種活躍したにもかかわらず、英喜の名は、今日では忘れ去られようとしている。

このような状況に至った要因にはいくつか上げられるがその第一は、作品を見る機会



男の顔 1908

英喜は、幼年時代に上京。明治十八年(一八八五)より四年間、中江兆民について漢学を学ぶ。法律を志して上京したと言われるが、その確証

が少かったためである。わずかに死去の翌年大札記念美術館(現・京都市美術館)の常設の一環として開かれた小規模な遺作展があるのみでありその意味からも今回の展覧会は、初めての本格的な回顧展である。

第二の要因としては、英喜の従兄であり師でもある浅井忠に隠れてしまったためである。父重成の兄常明の子が浅井忠であり、英喜にとっては最も血の濃い従兄弟にあたる。浅井忠は、幼年に父を亡し、都鳥家を後見として成人したため、都鳥家に対する恩義の念は強いものがあつた。英喜は、浅井の従兄以上の愛につつまれ、導かれて行く。

はない。明治二十一年(一八八八)浅井忠に西洋画を学ぶ。この西洋画の修得が、重要な役割を果たすこととなる。明治二十九年(一八九六)福沢諭吉が主宰する東京時事新報社に入社。絵画及び美術の事項を担当し、報導画家として新聞の挿絵を描く。この入社については、浅井忠が日清戦争の際、時事新報通信員として従軍しているところから、浅井の紹介によるものと考えられる。浅井に教示された絵画が、生活の基盤となり糧となる。さらに明治三十五年(一九〇二)新設された京都高等工芸学校の教授として浅井が赴任し、英喜も講師として京都へ移る。これもまた、浅井の推薦によるものである。この京都高等工芸学校は、死去するまでの主たる仕事場となる。京都での活動は、浅井とともに歩んでいる。すなわち明治三十六年(一九〇三)当時の家塾を合併して設立された聖護院洋画研究所では、浅井を助け伊藤快彦・牧野克次らと後進を育成し、それが母体となって三年後開設された関西美術院では教授となつて活躍した。特に後者は、浅井の亡き後、鹿子木孟郎が中心

的指導者となるがその期間は短く、実質的指導者は英喜とすることができよう。二つの研究所からは、安井曾太郎、梅原龍三郎をはじめ多くの逸材が世に輩出している。

以上のような英喜の活動は、浅井の名声に隠れてしまつても仕方ないところではあるが、英喜自身の画家としての活動に注目しなくてはならない。

明治二十四年(一八九一)明治美術会第三回展に「武具」(水彩)を出品。画壇へのデビューをする。この明治美術会は、明治三十年前後には黒田清輝を中心とする白馬会の結成等による弱体化、さらに展覧会問題等による体制の悪化を生じ、それらに慣りを持つ青年画家たちは、洋画青年会を組織。この発議は、英喜によりなされたものである。岡精一・満谷国四郎・鹿子木孟郎・有吉秀太・渡部審也・大倉正愛・藤村知子多・大下藤次郎らが参画している。この洋画青年会が核となり明治



諸寄村(習作) 1913

美術会を太平洋画会と改称、英喜にとつて中央画壇の重要な活動の場となる。しかし、同会展への出品は、断続的にしか認められない。さらに明治四十年(一九〇七)開設した文展及びその流れをくむ帝展・新文展への出品もまた断続的である。英喜の活動の場は、やはり京都である。当時京都最大の洋画団体である関西美術会に参画し、その第二回展から展覧会が中止となるまで出品をつづけ、京都市美術展では審査員として出品し活躍した。このような活動が中央画壇を中心とする今日までの研究の片隅に追いやられ忘れ去られつつある作家のひとりとなつた最大の要因と言



えるかもしれない。

なぜ中央画壇から離れて行ったのであろうか。本展覧会では、英喜の生涯を通じ油彩五十五点、水彩九点、パステル二点などを展示しているがそれらを一覽して、ヨーロッパの新思潮の影響をほとんど受けていない作家であることを知ることができる。わずかに、大正八年(一九一九)から約二年間のフランス留学の際の作品に、印象派の影響が認められる程度である。すなわち、初期の代表的作品とも言える「男の顔」(京都市美術館蔵「籠屋」の習作)は、浅井の脂派と称せられた画風に近く、留学前の「諸寄村」「上高地」では、パステルの油彩画を描いているが、これは鹿子木孟郎の影響によるものと思われる。さらに、帰国後は、日本の高湿の自然を描きつけ、晩年の代表作「村の道」で示されるように、あくまで油彩による自然への同化を目ざし、霧のかかったような淡白な画面に仕上げている。英喜は、ヨーロッパの新思潮に余り影響されることなく、ひたすらひとり信じる絵画を描きつけ、さらに後進の指導に使命感を抱きつけ

た。このような英喜にとつて新思潮を好む中央画壇は疎遠のものとなり、また中央画壇からも受け入れられることなく生涯を閉じたのであろう。この展覧会を契機として、都鳥英喜の画業に、正当な評価が与えられれば幸いである。(前川公秀)

### 常設収蔵作品展

第一期 三月二十日(火)～八月二十六日(日)

第二期 十一月三十日(金)～一月十三日(日)

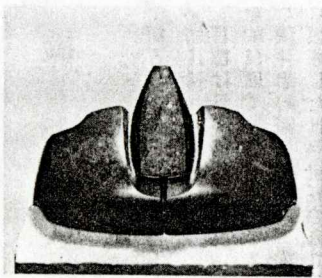
今年度は、洋画、日本画、彫塑、工芸、書の五つの分野から、明治以降の美術の流れを追って、本館の収蔵作品を展示します。また、昨年度の香取秀真にひきつづき、房総ゆかりの作家を紹介するコーナーを設けました。今回は、大網白里町の生まれで、二十年近くパリで暮し、自己の画風を追い続けた原勝郎(一八八九～一九六六)と、岸田劉生に師事し強い影響をうけ、船橋市に在住して千葉県の美術界に大きな功績を残した椿貞雄(一八九六～一九五七)をとりあげました。併せてご覧ください。

#### 主な作品の紹介

「雪の中の小鹿」(八六年頃油彩) ギュスターヴ・クルルベ(一八一九～一八七七)作  
「レアリスム」を標榜し、近代美術史に大きな影響を与えたクルルベは、社会のありのままの人間や風景を題材としました。また、森の中の動物を好んで描いています。この作品の雄と雌の鹿は、ルーブル美術館所蔵の「鹿の『かくれ地』」など二、三の他の作品の中にも、様々に組みあわせられて登場しています。

山崎英五(一九四七～一九八二)作  
彫刻を多くの人に、いつもご覧いただけるよう、屋外や館内の常設展示を図っています。

玄関前、県民アトリエ側に黒みかげ石の、かぶと虫を思わせる彫刻が展示してあります。作者は館山市出身で、新制作協会で活躍し、将来を期待されていました。三十五歳で惜しくも急逝しました。「地を這うものども」というテーマで、幼い頃から親しんだ昆虫や小動物をイメージした連作を続け、この作品(写真)で第四十五回新制作協会展新作家賞を受賞しました。(小泉幸代)



展示作家(第一期のみ)

洋画

カミーユ・コロー

アントニオ・フォンタネージ  
ギュスターヴ・クルルベ

浅井 忠  
石井 柏亭  
安井曾太郎  
大久保作次郎

林 倭衛  
板倉 鼎  
笹岡 了一  
松本 秋美

日本画  
富取 風堂  
若木 山  
渡辺 学  
松尾 敏男

彫塑  
藤野 天光  
鈴木 章  
木村賢太郎  
中島 幹夫  
鈴木 徹

工芸  
香取 秀真  
宮之原 謙  
信田 洋  
青木 滋芳  
鈴木 治平  
土肥 満

書  
鱸 松塘  
江川 碧潭  
大石 隆子  
高沢 南総

津田 信夫  
香取 正彦  
山本 正年  
藤田 喬平  
大須賀 選

石井 雙石  
浅見 喜舟  
小暮 青風  
浅見 錦龍

黒田重太郎  
梅原龍三郎  
石橋 武治  
中西 利雄  
小堀 進  
山谷 鏊一  
斎藤 捷夫

東山 魁夷  
杉原 元人  
関 主税  
高畑 郁子  
綿引 司郎  
大須賀 力  
郡司 和男  
山崎 英五

松岡 寿  
黒田重太郎  
梅原龍三郎  
石橋 武治  
中西 利雄  
小堀 進  
山谷 鏊一  
斎藤 捷夫

香取 秀真  
宮之原 謙  
信田 洋  
青木 滋芳  
鈴木 治平  
土肥 満



# 千葉県立美術館を去るにあたって

高橋 在久



お世話になりましたが、千葉県立美術館の館長を最後に慣例に従い三月末日に、思い出多い教育公務員生活に終止符をうち引退しました。三十四年間の道程でのご指導とご支援に対し、心からの感謝をさせていただきます。

三十四年間は戦後の大部分ですが、私にはついきのうのことのように回想できます。私は千葉県の公立高等学校に二年間ほど勤務した後、昭和二十七年三月一日付けで、井内慶次郎社会教育課長（元文部事務次官、現国立教育会館館長）に起用され、文化財係の創設準備要員として、千葉県教育委員会での勤務が始まりました。

業務は各種文化財の調査・研究・指定・活用などの専門性が問われた行政で、千葉県での草分けの一人として努力し、文化財主事第一号の光栄に浴しました。十八年間ほど

文化財保護行政の担当者として過ごしましたが、不思議なくらい初仕事の開設準備と運営に参画しました。

文化財係から文化財室の創設と室長就任、文化課の新設と課長補佐への昇格がそれです。行政に参画した十八年間の私は、文化財保護の仕掛人だったとも要約できそうです。この間、思い出深い『房総の民話』（未来社刊）や『生活の年輪』（桜楓社刊）などの著書も残しました。

昭和四十五年四月一日からは、文化課の課長補佐から、千葉県立博物館第一号の上総博物館館長に任命されました。鈴木勲県教育長（現文化庁長官）から直接の指示をいただき、四年間「歴史のなかの房総」を主題にした博物館の構築と、大衆化のための初体験を、一騎当千の館員諸氏と共にしました。

地域の文化工作者を自認し

ていた私の得意の時代でありました。年令も四十歳を過ぎ

たばかりであり、歴史やその遺産の再発見と普及事業が、理想的に展開し軌道化した印象は消えません。印象といえば、昭和四十八年の若潮国体の際に、ご来賓の皇太子殿下ご夫妻を「千葉県先覚展」にお迎えし、お食事まで一緒したことも大きな思い出であります。ここでは、『房総の年輪』（創樹社刊）や『房総昔話散歩』（創樹社刊）などの著書が生まれました。

昭和四十九年四月一日からは、大橋和夫県教育長（現船橋市長）から内示と課題をいただき、県立美術館副館長に任命されました。皆さんとのご縁が深まりました。松戸節三先生と市原正夫先生の二人の館長を補佐しましたが、当初は施設不備のなかで「みる・かたる・つくる」美の広場の構築に苦勞し、半面では、公立美

術館としての個性確立にも励みました。

目標は日本近代洋画界の先駆の巨匠で、佐倉市で成人した浅井忠の顕彰を軸に、地域に根ざした世界史観の確立と、独自の研究企画展を基本にした経営をめざしました。三代目館長に就任した四年間も同じ路線であゆみ、今井正県教育長の格別のご支援で、開館十年で『浅井忠記念賞展』などが開催でき、十年間のあゆみが社会的に認知され、大きな感激を館員と体験しました。ここでの著書は、上総博物館で開眼した『東京湾水土記』（未来社刊）をはじめ数冊があり、近く同社から『浅井忠の原風景』も刊行されます。

定年退職を機会に、地域の文化工作者としての、三十二年間のささやかなあゆみをふり返って見ました。手前味噌の感はぬぐえませんが、現在一人の野人として抱いている

感想は、三機関に勤続した三十二年間、どこでもいつでも上司や友人に恵まれた環境で、地域の文化の仕掛人として、理念と実践の間には大きなひらきを感じませんでした。しかも、私はどこでも順応性が発揮でき、歴史学を基調にした学際的な見識を培養しながら、夢見ることの多かった教育公務員生活ができました。これからは、すでに始動しておりますが、日本水土木文化研究所（東京都文京区湯島二―二―一創樹社内）を拠点にいたします。地域の水土と文化の歴史を軸に、多面的な学芸集団を形成しながら、研究と普及を図りたいと期しております。住所は相変わらず「110-0012 富津市大堀一五五一番地」です。

有縁の各位の弥栄を祈念しながらペンを置きます。

再見。  
（前館長）



新収蔵作品紹介 (XI)

昭和58年度も資料収集方針に則り資料の収集に努め、その一部は、これまで館報等で紹介してきたが、各部門ごとにまとめると次の通りである。

日本画

・購入

百奇夜行、ほか1点(浅井忠)

・寄贈

田植之図、ほか4点(浅井忠)  
浅井忠画・池辺義象歌(浅井忠・池辺義象)、風の中の釈迦(岩崎巴人)、五百羅漢ほか1点(田岡春彦)、智積院の庭(横尾芳月)

洋画

・購入

塚本靖肖像(和田英作)、大と人力車、ほか17点(浅井忠) aspettare(松本秋美)、絵画(高森登志夫)時の跡(斎藤寅彦)、海辺の光景(斎藤捷夫)、窓辺の少女(石橋武治)

・寄贈

楽器のある静物、ほか4点(三橋兄弟治)

彫塑

・贈入

Circle and triangle(米林雄一)地を

這うものどもⅧ、ほか一点(山崎英五)

・寄贈

地を這うものどもⅣ(山崎英五)

工芸

・寄贈

「作品63-7」室内とうろう(大須賀選)

書

・寄贈

崔子玉座右銘、ほか1点(浅見喜舟) いろは歌(千代倉桜舟)

その他、研究資料として、浅井忠の書簡(都鳥英喜宛)、教科書(浅井忠著)、関係資料等14点の寄贈があった。

塚本靖肖像

和田英作



昭和59年度

事業案内

展覧会事業

特別展「ミレー、コロ、クールベ展」

会期 9月1日～10月10日

内容 近代絵画の形成に貢献したミレー、クール、クルーゾン関係作家に焦点を当て、その多彩な活動をふりかえる。

特別展「速水御舟とその周辺」

会期 1月19日～2月27日

内容 本県茂原市の旧家の次男として生まれた御舟の果たした役割を、大正・昭和を中心とした近代日本画の流れの中に位置づける。

都鳥英喜展「房総の美術家シリーズ(14)」

会期 4月27日～5月20日

内容 本県佐倉市で生まれ主に太平洋画展、関西美術会展に出品し

関西美術界の重鎮として活躍した都鳥英喜の初めての回顧展。

カナダ・アルバータ州現代美術展

術展

会期 6月19日～7月8日

内容 カナダ・アルバータ州芸術家協会が審査・選抜した作家達の作品を紹介する。

第一回現代日本具象彫刻展

会期 2月2日～2月24日

内容 青葉の森公園の彫刻広場に設置する作品を全国公募し、その受賞作品及び入選作品を展示公開する。

第八回千葉県移動美術館

会期 佐原市中央公民館 9月12日～9月30日  
富里中央公民館 10月3日～10月21日

内容 本館収蔵作品の鑑賞の機会を広く県民に拡大し、地域文化の振興に寄与するため県内2か所で行う。

普及事業

美術講演会

特別展に関連させ、展覧会の内容をより深く理解してもらうため、本年度2回行う。(9月16日、1月27日)

美術を語る会

特別展、企画展等に関連させ、本年5回行う。

実技講座

◎日本画入門講座(7日間)

一期 6月～7月

◎日本画研修講座(7日間)

一期 11月～12月

◎デッサン入門講座(各3日間)

一期 7月

二期 8月

三期 11月

四期 2月

◎洋画入門講座(各7日間)

一期 6月～7月

二期 9月～10月

◎洋画研修講座(各4日間)

一期 6月～7月

二期 8月～9月

三期 11月

◎版画入門講座(7日間)

一期 8月

◎彫塑入門講座(7日間)

一期 10月～11月

◎陶芸入門講座(6日間)

一期 6月～7月

◎陶芸研修講座(6日間)

一期 9月～10月

◎七宝焼入門講座(2日間)

一期 9月

◎書芸入門講座(6日間)

一期 10月～11月

◎書芸研修講座(各2日間)

一期 7月

二期 2月

◎てん刻入門講座(各2日間)

一期 8月

二期 12月

実技講座

◎日本画入門講座

期日 6月15・16・29・30・7月18・19・20日

講師 宮沢一雅氏

申込締切 6月2日

◎陶芸入門講座

期日 6月17・18・19・20・27・7月6日

講師 明石昇氏

申込締切 6月2日

◎書芸研修講座

期日 7月10日・14日のうち2日間

講師 浅見錦龍氏

申込締切 6月25日

◎デッサン(水彩)入門講座

期日 7月下旬

講師 戸田健夫氏

申込締切 7月上旬

◎版画(銅版)入門講座

期日 8月4・10日

講師 平野正房氏

申込締切 7月21日

◎洋画研修講座(第二期)

期日 8月18・19・9月1・2日

講師 高橋規矩治郎氏

申込締切 8月4日

◎てん刻入門講座

期日 8月25・26日

講師 霊園鴻甫氏

申込締切 7月28日

◎陶芸研修講座

期日 9月4・5・20・10月2・3・20日

講師 上滝勝治氏

申込締切 8月21日

◎洋画入門講座(第二期)

期日 9月8・9・22・23・10月13・14日

講師 根岸茂行氏

申込締切 8月25日

ごあんない

※受講したい方は、往復はがきに、講座名、住所、氏名年令、友の会会員の方は会員番号を御記入のうえ、美術館学芸課普及班あてお申し込みください。応募者多数の場合は抽選になります。

団体展

- 第29回二科千葉支部展 5月22日～5月27日
- 二紀会千葉支部展 5月22日～5月27日
- 第7回一陽会千葉展 5月29日～6月3日
- 第11回千虹会日本画展

特別展入館料の免除対象者

六月十五日(千葉県民の日)及び六十五才以上の者、又は身体障害者(介護者を含む)精神薄弱者の方は入館料が免除されます。

日誌抄

- 3月 27 群馬県教育委員会より 来館
- 3月 27 八王子資料館より来館
- 4月 19 千葉県立美術館協議会 辞令交付
- 4月 2 野外彫刻場に北村西望作「天女の舞」設置
- 4月 23 友の会役員会(理事会・評議員会)
- 4月 27 千葉県美術館・博物館学芸課長・庶務課長会議
- 4月 27 企画展「都鳥英喜展」始まる(5月20日まで)

職員異動

昭和59年4月1日付けで次の職員が異動しました。

◆退職者

高橋在久(館長)

◆転出者

高橋 瑛(主査兼学芸課長→八日市場市立共興小学校校長)

久保木良(主査→成田市立東小学校教頭)

内山昭氏(主査→高校教育課 課長補佐・県立幕張東高等学校事務長)

小野禮子(学芸員→県立総南博物館学芸課長)

糸賀茂夫(教育庁社会教育課 課長補佐→副館長)

林 康高(教育庁福利課係長 →主査)

中村 哲(教育庁文化課副主 査→学芸課長)

中地昭男(教育庁文化課文化 財主事→主査)

森田 保(教育庁社会教育課 副主査・習志野市立 大久保図書館長→主 査)

金田雅成(県立総南博物館学 芸員→学芸員)

内野 泉(新採用・学芸員)

◆館内異動

平野 馨(副館長→館長)

鈴木喜久夫(文化財主事→主 査)